災害ボランティア論から人と社会を捉え直す

講師　渥美 公秀（大阪大学大学院人間科学研究科 教授）

目 次

1. 災害ボランティアとは
2. 災害ボランティアをめぐる秩序化の課題
3. 対話のツールによるニーズの把握
4. 秩序化と遊動化のドライブのバランス
5. 災害ボランティア論の再構築に向けて
6. 災害ボランティアを捉え直す

※このレクチャー・ドキュメントは、同志社大学大学院総合政策科学研究科と CEL（大阪ガス エネルギー・文化研究所）の教育研究協力協定に基づいて開設した「コミュニティ・デザイン論研究」講座から、2017年12月23日に同志社大学で行われた授業の一部をまとめたものです。

1. 災害ボランティアとは

僕は、阪神・淡路大震災で被災して以来、日本災害救援ボランティアネットワークという NPO の活動を続けている。

災害ボランティアの定義は、特にこれというものはないが、一般的には、災害現場に赴いて、自らの時間や労力を提供し、労働対価を受け取らずに活動に従事する人のこと。これが大きく社会に影響を与えるということが、特に阪神・淡路大震災以来、言われるようになった。この資本主義の世の中に、ただでやるという人がこんなにいるのだと、経済学者はどう扱っていいのか非常に困ったそうだ。考えてみればそういうことは昔からあったが、お金お金となってきている世の中で、こういうボランティアが途絶えずにあること自体、面白い社会現象だと思う。

災害ボランティアといっても、世界中の災害を一気にグローバルに扱うという人はあまりいない。議論としては気候変動などが出てくるが、実際の活動としては目の前の被災者という非常にローカルなところで動いている。1995年の阪神・淡路大震災では多くの一般人がボランティアに参加し、ボランティア元年と言われるようになった。福祉のボランティアはもっと前から盛んに取り組まれていたため、災害ボランティア元年といった方が正しいと思う。

僕は、期せずしてボランティアをやりながら現場研究をやることになり、エスノグラフィーや質的研究に向かっていった。そうすると、ローカルなものしか見られない。そこから一般化するということも簡単なことではなく、すべきではないという理屈もたくさん立つ。しかし、抽象化はしてもいい。理論的に考えることは自由にできる。

2. 災害ボランティアをめぐる秩序化の課題

今の問題は、一言で言うと過度の秩序化。ボランティアが秩序化されて、例えばマニュアルができたことによって、自分が思ったこと、気付いたことを基にその場で臨機応変に対応することが、よろしくないこととして言われるようになってきた。象徴的な言葉として、「野良ボラ」という言葉がある。熊本地震で、秩序に従わずに動いているボランティアの人をそう呼ぶようになった。それが本当にいいのかということ。神戸のときは全くその逆だった。

熊本地震を例に話そう。熊本地震は2016年の4月14日と16日に発生した。4月14日の揺れは、夜の9時過ぎ。テレビのテロップで震度7と出た途端、体が震えた。翌日、NPO から2人と経験のある学生3人を連れて現地へ入った。学生は避難所に放り込んで何でも手伝わせた。僕たちもそこで救援活動をしてもいいのだが、第2陣のメンバーをバスで連れてきた方がいいのか、何日ごろか入ればいいのか、どの地域に行けばいいのか、どこが中心になっているのかということを調べて報告する仕事もしなければならなかった。熊本市内の旅館に帰って報告を書き上げ、夜になってみんなで雑魚寝をしていたときに、本震が起きた。旅館の壁に斜めにひびが入った。もう1回来たら終わりだということで、みんなで旅館の駐車場に行った。他の宿泊客も外に出ていて、旅館の毛布などを取ってきてみんなにかぶせたりしながら朝を迎えた。前日に調査した場所を見に行くと、被災したエリアが広がっていて、これは大災害なのだとようやく分かった。

少しすると、ボランティアセンターが開設された。これも秩序の一つだ。全ての自治体に必ず一つ、社会福祉協議会とい

うものがある。日頃は福祉を見ていて、災害時はボランティアセンターを開くというのが、約20年近く続いている。ところが、このボランティアセンターもいろいろな問題がある。ボラセンは社協が中心になって作るが、その職員も家がつぶれたりしている被災者で、ここからさまざまな問題が出てくるのはいつものことなのに、改善されない。これが今回の一番の問題だった。

連れていった大学院生の一人に、ボランティアセンターの秩序の中でボランティアを体験してもらって、そこで見えてきた問題をレポートしてもらった。そうしたら、彼はすごく怒って帰ってきた。ボランティアセンターというのは、行くとまず受付で名前や住所の記入、保険に入っていなければ加入などの手続きをする。続いて、力仕事はできるか、車はあるかといろいろ質問される。そして、例えば「5人で1丁目の ×× さんのブロック塀の片付けをやってほしい」と言われたら、それをやって、どこまで片付いたかを夕方に報告して明日に引き継ぐ。この繰り返しだ。

×× の掃除と言われて、5人ぐらいで行って掃除をしようと思ったら、まだそこにタンスなどが倒れていて、掃除ができない状況だったので、「物をどけましょうか」と言ったら、少し年上のリーダーが、「私たちは掃除に来たのです。物をどけろとは言われていません。他のボランティアが物をどけろという指示を受けているかもしれないから待っていましょう。秩序を乱すのは困ります」と怒ったそうだ。

次の現場に行ったら、今度は先に掃除がしてあったそうだ。しかし、庭も玄関先も壊れているし、買い物や水くみなど、他にもやることがたくさんある。それをやろうかなと思ったら、「いや、もう掃除が終わっているから帰りましょう」ということで、帰ったそうだ。

ボランティアセンターはそういう問題がたくさん起る。あるとき、38件のニーズがあり、394人のボランティアが並んでいた。5人ずつだと180人ぐらい余る。余った人たちは、さっき受付を済ませたのに、今日はもう仕事がないと言われ、帰るしかなかった。そういう日が続いて、ボランティアに行った身としては怒りたくもなる。結局それがエスカレートして、そのボランティアセンターを運営していた女性が、土下座して謝れと言われて、実際に土下座して泣いて謝った。その女性も地元の人で、被災者だ。怒っているボランティアの人は、被災者の気持ちが分かっているのかと言って怒鳴る。私も被災者ですと言い返したいが、立場上、言えない。本当にかわいそうだ。中には、お父さんを亡くしてドライアイスに詰めている状況で行ったり来たりしている職員もいた。そういう中で、一生懸命ボランティアセンターを運営せざるを得ないわけである。

3. 対話のツールによるニーズの把握

水くみなどが一段落すると、われわれ NPO で避難所を訪れて、足湯をやった。足が凝るからではなくて、対話のツールとして行った。被災者が足湯に座っていたら、若い大学生が来る。学生たちも世間話が下手なので、ぎこちないのだが、話すことは、少なくとも家の片付けの話ではない。お孫さんの話になったり、大阪から来たと言ったら「昔は大阪で出稼ぎをしていた」という話になって、和やかになっていった。お湯が冷めると、お菓子などが置いてある隣のスペースに移って、一日中おしゃべりしていた。そういう場を作った。この足湯は人気で、ここでいろいろなニーズも出てきた。例えば、リハビリの先生が見つからないというニーズがあったので、館内放送をして来てもらった。

被災地で行った足湯

仮設住宅に移ると、今度は炊き出しだ。これもコミュニケーションツール。僕たちは、仮設団地の中でお好み焼きなどを作って配った。仮設の地図を置いて、何番の人が受け取ったかということをチェックし、受け取っていない人には配達に行った。突然訪れたら驚かせてしまうので、「今日、お好み焼きをやっていたのに、おばちゃん、来なかったね。何で?」と聞いて、足が痛くて動けないと言われたら、その人は足が痛いということをチェックしておく。「今日はちょっと別の用事があったから」と言われた場合は、ちょっと覗いてみて、車椅子がないか、松葉杖がないか、あるいは一升瓶が転がっていないかなどをチェックする。そういう見守りをするための炊き出しを、今も続けている。

やはり先ほどのような問題がある。別に社協の人は悪気があってやっているわけではない。これはシステムの問題。それから、「これで終わりです」と言われたボランティアが、そ

のまま帰るのではなく、そこから外れて自分で何かやればいいと思うが、それをやってはいけないと考える社会の動向がある。これが秩序化のドライブだ。こういうボランティアが正しいボランティアだとか、ボランティアは登録しないとやってはいけないなどと思われているが、そんなことはない。やることはいくらでもある。道が狭くなるのを気にして外の荷物を片付けている人がいたら、「ここは僕たちがやるから、おじいちゃんは中のことをやっておいで」と言えば、それだけでもいい。何でもないような会話から始めればいいのだが、それがやりづらくなっていることが問題だ。

それから、ボランティアセンターがどうやってニーズを把握しているかということだが、アンケートのような A4の票があって、それを地震の後に各家に配っている。しかし、被災者の心理としては、隣の家の方が大変そうなときに、自分のところだけ来てくれとは書けない。こちらから聞きに行っても「いやいや、うちなんて」と言われる。ちょっと寂しいから来てほしいとか、犬の散歩に来てほしいというときに、丸を付けるところがない。買い物も、近所のスーパーは壊れているから車で行かなければならないけれども、車が取り出せないなど、それこそつぶれている隣の家に頼めないということがいろいろあって、少し手伝ってあげれば済むことなのにと思う。先ほど言った38件のニーズというのは、ニーズ票の数が38枚だったというだけで、そこに5人ずつ人を送ったからもうニーズがないというのはうそだ。

4. 秩序化と遊動化のドライブのバランス

何が起こっているか、理論的に整理してみたいと思う。

秩序化のドライブと遊動化のドライブがある。ドライブというのは、誰のせいでもない社会の動向、雰囲気、流れという意味で使っている。秩序化することがいいことだという社会の動向が日本の中にある。今のような保守的な世の中になると特にそう。整然と活動する災害ボランティアが、さも被災者にとってよいことのように考える社会の動向ということになる。

それに対して、遊動化のドライブとは、災害ボランティアはまず被災者のただそばにいることから始まるのだから、マニュアルは不要であるとし、ニーズはそのときそのときで多種多様であるから臨機応変に応じるべきとし、コーディネートよりも被災された方々への想いを大切にして即興的に対応していくことを推奨する社会の動向ということになる。

僕たちもいろいろな人に出会ってきた。いわゆる軍隊チックな人たちもいる。バスから降りて来て「前から番号!」と言ったら、ぱっと並んで、「駆け足」と言われて水をくみに行っている。それはそれでいい。僕たちのところは、最初はボランティアの人がだらだらとバスから降りてきて、「コンビニはありますか」「携帯の充電が切れたのですけど」などと言う。そういう人を被災者の前に連れていくと、これではいけないと思って、いろいろなことを考えるようになる。僕はその方がいいと思ってきたが、やはり統制をとってやっていく方がいいという人もいて、絶対にこちらがいいということはない。問題は、今までは二つのドライブが拮抗しバランスが取れていたのが、崩れてきたこと。

僕は遊動化のドライブが間歇的に起これば それでいいのではないかと思っている。どういうときに起こるかというと、被災地のリレーというのがある。神戸の人たちは全国から助けてもらったけれども、感謝の気持ちをどこに持っていけばいいか分からなかったので、新潟が大変なときに新潟に行った。新潟の人に「ありがとう」と言ってもらって、やっと何となく落ち着いた。次に、新潟の人は支援を受けるばかりで落ち着かないので、東北に行って支援して、何となく落ち着いた。そして、たくさんの東北の人たちが、支援ばかりされると気が重いと言って、熊本まで行って支援した。支援された人が、支援してくれた人にお返しするのではなく、次に支援するというのは、進化生物学的には不思議なことだという。しかし、何が不思議なのか、それでいいではないかということで、僕たちはこういう支援のリレーが起こることに関して、シミュレーションや研究をしている。

例えばこういうことが起こる。東日本大震災のとき、新潟の人はバスに乗って東北に行くが、西宮からのバスも新潟経由で岩手に行くので、以前、支援して知っている者同士が新潟で落ち合って、神姫バスと越後交通が並んで岩手に入っていった。僕はそれを見て涙した。

過去の被災地が次の被災地を支援するというのは、当時の僕はあまり経験がなかったので、1日のプログラムを作っていた。現地に着いたら、そんなことは関係なくなった。バスを降りた途端、仮設住宅に行った途端、みんな抱き合っていた。昔から知り合いだったのかというぐらい。どちらが泣いていたかというと、大体、新潟の人が泣いていた。それは、支援を受けるばかりだった自分が、やっと支援する側になれたということに感極まっている。こういうシーンは、プログラム化したり秩序立てたり、係を決めたりして起こるものでは

なく、遊動化そのもの。何をするかなどは適当で、振り返ってみても何をやったかよく分からないけれども、気持ちとしてはお互いに非常に分かり合えるという場面がある。それを報道していただけると、みんなも、秩序立ててニーズに応えるだけのボランティアだけではなく、気持ちで通じる面というのもあるということが分かると思う。そうするとまた次に続くと思うので、間歇的にこれが起こればいいのではないかと思っている。

5. 災害ボランティア論の再構築に向けて

災害と共生研究会というクローズドな研究会を大阪大学で立ち上げた。僕が代表を務めているが、そこで電子ジャーナルを刊行して、書いた一つ目の論文が「災害ボランティア論の再構築に向けて」というもの。今、災害ボランティアがなぜうまくいっていないのか、理論が必要だ。

その論文の中でも紹介しているが、柄谷行人さんが『世界史の構造』という本をベースに、ある枠組みをつくった。人と人がどのように交換するかで世の中を分けるというもの。ABCD という順番で世の中が動くとする。A は、その前にあった U を否定する。U は狩猟の世界。定住していないというのが U。それを否定しているのが A で、これは定住する。この時代は部族社会で、弥生時代と思っていただければいい。定住していて、あちこちに行かないので、互酬性だ。贈与と返礼の交換パターンである。

そういうことをやっていても広がりがないので、次は B の時代になってくる。略取と再分配（支配と保護）。税金のようなものを納めて、分配する。こうなってくると国家ができてくる。国家の枠組みを超えて、どこの国の誰か分からない相手に投資したりできるようになってくると、C だ。つまり、今のグローバル化の時代。その否定がうまくいかなかったときに逆戻りして、今度、C の商品交換が否定されたら、次に平和なときが来ると言っている。

この理屈で言うと、A と B を C をしっかりと否定しないと D に行けない。D はボランティアに近いといわれている。特に災害ボランティアだ。物を買っているわけではない。誰彼構わず、見知らぬ人に、距離があってもそこまで行って、自分の持っている時間やエネルギーをあげるというのは、ABC にはない。これは、A が否定した U が戻ってくるということにもなる。しかも、もう少しハイセンスになっているというのが、彼の本の中に書かれていること。さらに彼はこの後、対談の中で、「今の災害のボランティアを見てください。『私のおにぎりを半分あげます』という美しい心をみんな持っています。ですから、それを出せる世界を作っていくのがわれわれの役目です」と言っている。

ではここからどうするかというと、ポイントは、しっかりと否定しておかなければいけないのに、振り返ってみるとそれができていないということ。災害ボランティアセンターは、結局、国家の言いなりになっているのではないか。一度全部集めて、みんなにエネルギーを分配している。それをやり過ぎると、今度はお金を払わなければならないと気にしているので、C を全く否定できていない。それから、ここでお世話になったからお返しするという A の範ちゅうにとどまっていて、誰彼構わずとは思っていない。ABC をきちんと否定していない。では、NPO（nonprofit organization）は機能したのだろうか。Nonprofit ということは、C を否定しようとしたはずだ。それから、NGO は B を否定している。しかし、否定せず、むしろ国家と一緒に動く NGO や企業と一緒に動く NPO が多い。体制側からすれば、取り込まれているわけだ。

現状、NPO や NGO が、かえって D を目指している災害ボランティアの足かせになっているのではないか。なぜ秩序化のドライブが席巻して遊動化がうまくいかないのかというと、せっかく作った NPO の NP と NGO の NG が機能しないことが原因であるから、もう少し経済的、政治的な要因との距離の取り方を考えていくことが、ボランティア論の再構築につながるのではないかということである。

6. 災害ボランティアを捉え直す

災害ボランティアを捉え直すといっても、一人一人の災害ボランティアはどうなるのか。先ほどの論文では、NPO はどうとか、人様のやっている組織に偉そうに言ったが、災害ボランティア一人一人を捉え直さないといけないのではないかというのが「郵便的マルチチュードとしての災害ボランティア」

郵便的マルチチュード

- **誤配するので、スケールフリー性に対抗し、スモールワールド性を取り戻すことになる。**
  - スケールフリー性：一極集中・秩序
  - スモールワールド性：意外なつながり（の回復）
- **出会うはずのない人に出会い、行くはずのないところに行き、考えるはずのないことを考え、秩序を打破していく。**

という論文。「郵便的マルチチュード」というのは、東浩紀さんが『ゲンロン0』で示している面白いアイデア。

東さんは、現代社会について、ネーションと国境を越えた市民ということを言っている。ネーションというのは、贈与と返礼の関係、顔見知りの関係、部族社会などもそう。それと国境という法的に決まったものを簡単に超えてしまう市民。これはネグリとハートが『帝国』という本で言ったマルチチュードと似ている。一人一人がばらばらで絆などは求めていない。ところが、こういう人たちが Twitter などで呼び掛け合って集まると、アラブの春になる。そういう時代を見据えて言っている言葉だ。

ネグリとハートは帝国一元論を提唱しているから、これからは国家もつぶれて、全部グローバルになって帝国になるのだと言っている。しかし現実はそうではなくて、ネーションとグローバリズム、ローカルとグローバルが二極化している世の中ではないか。では、どうしたらいいのだろうかというのが東さんの話。彼が面白いのは、誤配というアイデアを出してきていること。ばらばらに動いていて、僕らはよく間違えたところに行く。彼は、誤配のそういうところが面白いと捉えている。

誰と誰がつながっているかというネットワークを研究した人たちによると、人々のネットワークの中には二つの性質が必ずあるそうだ。その一つがスケールフリー性で、一極集中を導く力。特定の人に集中するという性質がある。

二つ目は、スモールワールド性。これは、意外な人とつながるという性質を持っている。スモールワールド実験というのがあって、例えば、北海道と沖縄の人が、平均5～6人を介すればつながる。これがスモールワールド性。顔が広い人が間に挟まると、ぱぱっとつながる。スケールフリー性を放っておくと、人気があるところに集まる。しかし、間違えてもいいという方法を取ると、意外な人とつながって、それがスモールワールドを導く。一番うまくつながれるのは、ランダムにしたとき。誰とでもいいからつながってごらんというときに、平均すると意外な人とたくさんつながれる。

それが、災害ボランティアと似ていると思った。突然、地震が起きて、行くはずのないところに行き、出会うはずのない人に出会い、考えるはずのないことを考えて、何でもやって、災害ボラセン一点張りという秩序を打破する。まさにこれは東さんが描き出した、これからのグローバルとローカルが混在する世の中にいる人の在り方ではないかと思った。そういうふうに読み替えると、すごくピンとくる。

われわれ災害ボランティアは、支援が集中しないところに行くように心掛けている。これはスケールフリー性にあらがっている。そうと知らなくてもやっていて、誰も行かないところこそ支援が必要だと思っている。そうした行動が、被災地のリレーとして連鎖することが、郵便的マルチチュードの一つの特徴ではないかと考えている。

展 望

- **理論的には、「災害ボランティア＝郵便的マルチチュード」。**
  - 災害ボランティアを郵便的マルチチュードのもつ誤配の戦略を現代社会に持ち込む存在として把握する。
  - 次の一手：「中動態」責任・意志を問う“文法”からの離脱
- **実践的には、災害ボランティアの誤配的活動を推進する**
  - 具体的には、災害ボランティアセンターを離れて、ふらっと地域に関わることの推奨こそが、秩序化のドライブを打破する。

そうすると、災害ボランティアは郵便的マルチチュードなのだということによって、災害ボランティアの持つ誤配の戦略を現代社会に持ち込む存在として把握してはどうだろうか。これはもちろん批判がある。経済的に成り立っていないとできないし、目の前の親の介護がある人はどうするのだと、いろいろなことを言われる。それはそうだが、そこを解きたいという問題ではなかったということで勘弁いただくとすると、ボランティアが硬直化してうまくいっていないときに、これからどうしたらいいかというと、ふらっと行けばいいのではないか、誤配すればいいのではないかということを、これからの方針にしてはどうか。別にボランティアセンターをけなしているわけではない。あそこはあそこで一生懸命やっている。そうではなくて、ボランティアこそが、列に並んで怒鳴り散らすのではなく、ふらっと行ったらいいのではないかということ。

その次の一手というか、國分功一郎さんの『中動態の世界』という本が注目されている。支援する側、される側、誰かが何々をする、される、つまり能動態と受動態しかない中で、そうではない態があったのだという話。支援の現場でも、支援する側とされる側があって、誰がしたのかと責任を問われるし、何でしたのかと意思が問われるのだが、ボランティアの現場では、そうではないときが実感としてある。

こうした事例の理論化の蓄積から、どうやって新しい社会を構想していくのか、変革に向かって自分はどう運動していくのかということが課題だと思っている。